

セバスティアン・ミカエリスと『霊についての言説』

菊地英里香

はじめに

魔女狩りが猛威を振るっていた近世ヨーロッパにおいて、魔女撲滅のためにエリート層が常に一枚岩だったわけではない。1580年から1630年にかけての時期は大規模かつ集中的な魔女狩りが起こった時代であるが、当時のエリートの中には「魔女」（本稿では「魔女」とされた者たちの中には男性も含まれるため、「妖術師」を同義で用いる）の存在を疑う者や魔女狩りに懐疑的な者たちもいた。この時期に出版された悪魔学の著作の中には、そのようなエリートに妖術師の存在を確信させ、彼らの排除を正当化することを主要な執筆動機としたものも少なくなかった。今回取り上げるセバスティアン・ミカエリス（1543－1618年）はドミニコ会の神学者であり、エクス修道院悪魔憑き事件の当事者としても知られている。学識豊かなミカエリスは、異端審問官として実際に妖術師たちを裁いた経験も持ち合わせていた。本稿では、彼の悪魔学の著作である『霊物論、あるいは霊についての言説』（1587年）を取り上げ、その執筆目的と内容を概観し、論証の特色を考察することにする。

1 ミカエリスについて

セバスティアン・ミカエリスは、マルセイユの公証人の息子として1543年にサント・ボームのふもとのサン・ザカリーに生まれた。彼はドミニコ会に入会し、マルセイユ、その後はパリ、トゥールーズで学んだ。22歳だった1565年頃には司祭になり、1574年には神学の教授も行っていた。同年から1578年までマルセイユの修道院長を務めた。1589年にはアルルで神学を教

えた。彼はアヴィニョンの異端審問官でもあり、1582年には18人の妖術師を火刑に処している。プロテスタントとの論争に加担する一方で、彼はドミニコ会の中で非常な速さで要職を占めることとなった。1589年にオック地方管区の管区長、1593年にはクレルモン・レローの修道院長となり、本来の厳格さを取り戻すべく修道会の刷新を試みた。彼の推し進めようとした改革は厳しいものであり、以下のような内容を含んでいた。肉食禁止、サント・クロワ祭（9月）から復活祭までの断食、常時沈黙の厳守、週一度の公開懲罰、1年に10日の霊的修練、夜課への参加義務、一切の私有禁止、修道院中での階級の廃止。ミカエリスは世俗とは距離をとろうと努めてもいた。彼は、1587年に『霊についての言説』を出版し、1613年にはエクス修道院悪魔憑き事件について記した『驚嘆すべき物語』を刊行した。『驚嘆すべき物語』の巻末には『霊についての言説』の改訂版が収録されている。

彼は1593年のロデーヴを始め、各地で改革運動を推進し、1599年にはトゥールーズでもこれを行った。1606年にプロヴァンスに戻り、その時サン・マクシムの修道院長に任命された。当時ミカエリスはリーグを支持していた。彼は信仰を組織的に守り、異端やポリティーク派を批判した。宗教戦争の終わり頃、サン・マクシム修道院はうまく機能していなかった。プロヴァンス高等法院の法院検事オノレ・ドゥ・ローランは、そこが多くが無秩序とスキャンダルで価値が下がっていると嘆き、ミカエリスに修道院の改革のために援助を要請した。サン・マクシム修道院の修道院長は、修道士たちの提案によって王が任命するように定められていたのであるが、1606年アンリ4世は自分の権限だけで、修道士たちへの相談なしにミカエリスを修道院長に任命した。そのため、修道士たちは訴訟を起こして対抗したが、結局彼らは修道院を去り、ミカエリスはトゥールーズやロデーヴから仲間たちを呼び寄せた。しかし、改革はうまく進まず、1609年には修道院の規律の行き過ぎに対して訴えが起こされている。1613年にはパリのサン・トノレ街のお告げのマリア修道会で改革を行っている。1618年、ミカエリスはパリで没した。

ミカエリスはカトリシズムを擁護するために、内側と外側に対して戦いを挑み続けた人物であったと言える。すなわち、内側への戦いとは修道院改革であり、外側での戦いとは異端（プロテスタントや妖術師）との戦いであっ

た。このような宗教的熱意に満ちた彼は千年王国説の信奉者であったと考えられている。「ヨハネの黙示録」(第 20 章)において、天使がサタンを千年にわたって鎖につなぎ、そのとき正しい者たちがキリストとともに復活し、この千年のあいだ地上にあって統治するだろう、と告げられている。千年王国説に関しては中世を通じて様々な見解が示され、12 世紀にフロリスのヨアキムは千年王国説を決定的に復活させた。彼によれば、この世は父の時代(旧約聖書)、次に子の時代(新約聖書)を経て、最も大いなる恵みの時代である聖霊の時代に入るのだという。この第 3 の時代が「至福千年」であり、聖霊の時代に入れば、修道士たちが世界を治め、人類は福音にかなった生を送り幸福でいられるとヨアキムは説いた。ヨアキム説を信奉するフランチェスコ会心霊派の修道士たちは教会の富と権力に反対し、体制側から迫害を受けた。ミカエリスもまた教会を批判し、ドミニコ会士たちを矯正しようと努めた。ミカエリスのたゆまざる修道院改革はこの教説と深く結びついている。その厳格主義と刷新へのあくことなき欲求は千年王国の待望の一形式であったとも言える。

2 『霊についての言説』の目次

まず、本書の目次を記しておく。

第 1 章 霊たちは存在するか否か。霊について知るべき 4 つのことがらがある。彼らは存在するか、何をするのか、どこからやってくるのか、なぜ存在するのか

第 2 章 霊は身体をもっているか

第 3 章 天使の創造、天使の善良さ、あるいは悪意について

第 4 章 悪霊たちが私たちのほうへやってくる方法。彼らは世界のどの地域

に住み、つながっているのか。彼らが人間を試す方法について

第 5 章 悪魔の目的は人間をだまし、自らを神として崇めさせることに他ならないということ。悪魔は未来のことがらについては何も知らないということ。人間の心の中に入り込んだり探ったりできないということ

第 6 章 男性の妖術師は異教徒の神託や偶像と同じくらい忌まわしく、同様に神法によって禁じられているということ。妖術師たちが言うことは作り話ではない。君主たちは気をつけるべきだ。古代の妖術師たちが用いた方法について。すべては聖書によって証明されている

第 7 章 妖術師について。女性たちのほうが男性たちより、より妖術師になる

第 8 章 悪魔を利用したりそれに仕えたりすることに、どんな危険があるかと尋ねる者たちへの答え

第 9 章 供述に含まれている諸事項は夢によって生じたととらえられるべきか、あるいは真実、現実をとらえられるべきか

以上のように、本書は 9 章から構成されている。さらに巻末に、ミカエリスが異端審問官としてかかわった、「1582 年にアヴィニョンで 18 人の妖術師の男女に下された判決の要約」とそれへの注（11 項目）が付されている。

3 序文について

まず、本書を執筆した理由についてミカエリスは、それが単なる知的好奇心からではないと断言する。ミカエリスは、霊と妖術について知ることが聖職者にとって必要であると述べる。聖職者たちは、使徒たちを通じてキリス

トの名においてすべての邪悪で不浄な霊たちを祓い、押し返し、追い払うようにとキリストによりはっきりと命じられている。悪霊を相手にするという点では共通しているとも言えるが、妖術師たちが呪文によって呼び出すのは様態がちがうとされる。ミカエリスはテルトゥリアヌスの言葉を引用する。「引きつけるいかなる手段によるのでもなく、私たちは支配する力によってそのものを操る」。

ミカエリスは、キリスト教徒たちだけが悪霊を追い払う力と権威をもっていると述べる。そしてサタンの支配を蹴散らし壊滅させるため、異端を論駁するためにはそれらについての知識がキリスト教の博士たちに必要であり、病気や伝染病を打ち負かすためにそれらについての知識が医者たちに必要なと同様に、このような学が教会の人々に必然的に要求されると結論することができるとした。

本書のテーマである妖術師をミカエリスはどのような者たちであると理解していたであろうか。その答えもこの序文の中にある。妖術師たちには「悪魔どもにおけるのと同じように、本性の残存を除いてはいかなる徳や善性の痕跡も認めることができない」とされる。そして彼らの最も糾弾されるべき行為は偶像崇拝にあると言われる。

実際、後にも先にも彼らは最も汚れた偶像崇拝者たちである。なぜなら、それが悪魔であると熟知していながら彼らは悪魔を崇拝しているからだ。かつて偶像崇拝者たちは悪魔を崇めていたが、彼らはそれが神であると考えていた。そして、そのため聖アウグスティヌスが言うように、偶像崇拝を行う単純な人々は博識な哲学者ほどは重大に神に背いてはいない。なぜなら「単純な」人々がこのような偶像の起源も理由も知らないのに対し、哲学者たちはその汚らわしさ、悪徳あるいは人間の発明に由来する起源を熟知しているからだ。同様にキリスト教徒にこれを認めなければならず、彼らは比類なくはるかにもっとも劫罰に値する。

このような妖術師たちの悪しき性質と彼らの行っている諸悪行をつまびらかにするために、ミカエリスは本書を著した。彼はラクタンティウスの言葉を借りながら、キリスト教徒のみならず、異教徒たち、さらには無神論者に至るまで、すべての人々を納得させられるような論究を目指すべきだと述べている。そして、まずそれまでの悪魔学の作家たちを3つに分類する。①妖術師に関する物語の単なる寄せ集めと彼らに対してなされた訴訟と彼ら自身の証言や告白に基づいて論じる者たち。②純粹にスコラ学的に行い、『四巻の命題集』についての注解からほとんど出ないような者たち、③このようなやり方にうんざりし、メルクリウス、プロクロス、イアンブリコスのような古代の異教徒の哲学者たちに従って語ることをむしろ好む者たち。それらは、実にしばしば聖書の権威に反していることすらあった。ミカエリスはそれぞれを次のように批判する。①の者たちは、事実を単に受けとるだけでそれらを証明しない。②の者たちはスコラ学的な解決は与えるものの、私たちの時代の気の短い者たちはそれに耳を貸そうとはしないだろう。③の者たちは、哲学者たちはいくらかの真実に関してはうまく書いているが、結局それらは間違いの混入を免れていない。ミカエリスはアウグスティヌスの言葉を引用しつつ、異教徒の哲学者たちが論駁や護教のために役立つことを認め、真理にしたがって正しく述べられたことに関しては、権威として認められるとする。とはいえ、実にしばしば彼らの語ることは聖書の権威に反するものだったと述べる。このように3つの著述スタイルに批判を加えた後で、はるかにもっと確実に適法なまだ実現されていない別のひとつの方法があることに気づいたと彼は言う。すなわち、聖書と古の教父の教えにしたがって論じるという方法である。もちろん、彼以前に悪魔学の著作を残した神学者や法律家たちの多くも、聖書を第一の権威とし、アウグスティヌスや教父の言葉を援用して妖術師について論じていた。とはいえ、あえて序文でこの点が強調されていることに注目しておきたい。

4. 霊の存在証明

すべてのものごとをよく理解するためにはそれらの原因を知らなければならない、そうしないと常に迷うことになり、納得することはないとミカエリスは述べる。とりわけ異例で奇妙なことを検討する場合にはそうしなければならないと言ひ、アリストテレスによって挙げられた例を引き合いに出す。すなわち、太陽や月の食を見た田舎の人々はそれらに驚嘆する。あたかもイスラエルの子らがマナを見たときのように。そしてこのような驚嘆こそがすべての哲学の根源だとアリストテレスは言う。そこで、まず、多くの人々の認識や経験からは遠いところにある霊というものについて知るべきであり、この原因を知れば、そのようなものの存在が可能であるということのみならず、それらが頻繁に現れることを理解できるとミカエリスは述べる。

妖術師たちの悪行の原因は悪霊たちであるので、まずはそもそも霊が存在するか否かが議論される。霊の存在を否定する者たちは3つのグループに分けられる。①ある種の哲学者たち、②サドカイ派、③無神論者。①に関連し、はじめにアリストテレスについて触れられている。アリストテレスは質料をもたない至高の第一原因があることを認め、天球の運動の数に従って47の霊があると考えた。天球は霊がともになれば動くことができないとされていた。このことは聖書でも明らかにされており、エゼキエルは天球のことを車輪と呼び、「生き物の霊が車輪の中にあった」（「エゼキエル」1：20）と記されている。このような霊は天球の日常の絶え間ざる動きにとって必要なものであり、人間にとってもそうである。だが、アリストテレスは悪霊の存在を否定している。そのあとでは医者たちがこの見解に追従した。ミカエリスによれば、彼らはたいてい2つの間違いを犯している。まず魂の不死（知恵2：23）に反する。そして、ミカエリスは悪魔憑きの体に悪魔による効果を目にするとき、それを体液や生命精気のせいにする者たちがいるが、彼らはアリストテレスより劣っており、彼らは不死で朽ちることのない霊を微細で自然の性質から引き出されたものへと変えたと述べる。②のサドカイ派も同列にある。「使徒行伝」（23：8）が伝えるように、彼らは霊の存在を否定した。そこから彼らは魂の不滅と肉体の復活を否定するというまた別の不合理に陥った。この3つの点は③無神論者および霊を否定するすべての者たちにも共通するとされる。そして、ミカエリスは以下のように述べている。

要するに、聖書を理解し受け入れる者を除いては、誰も霊が何であるのかを理解していなかった。すべての哲学者と異教徒に対して私たちは経験をもっており、ユダヤ教徒の中の異端であるサドカイ派（テルトゥリアヌの言うように）に対しては、彼らがもっぱら受け入れるモーセ五書をもっており、カトリック教徒とすべてのキリスト教徒に対しては、私たちは新・旧両方の聖書をもっている。『対異教徒大全』の第三巻（104、105）において、驚嘆すべきことがらが起きたときにそれを天球の影響に結びつけるべきだとする哲学者の理屈に対して、トマスは言う。確かに自然は多くのことを成し遂げることができる。しかしそれには限界がある。さらに自然の力に反することがあるのも認めなければならない。神託は像に他ならず、かつて話した質問に答え、隠されたことや未来について述べた。学んだことがないのにヘブル語やギリシア語やラテン語やシリア語、カルデア語を突然話す者がいる。また、牛やロバが話すようなことが起きたのは、まったく自然の力に反したことがある。これらのことは霊に由来するとトマスは結論する。

最後に触れられている、学んだことのない言語を話すという現象は、悪魔に取り憑かれた人間にしばしば見られたものである。異端審問官として悪魔憑きと対面した経験から、ミカエリスはこの現象が哲学者や医者 of の言うように黒胆汁のせいではなく、悪魔によって引き起こされるものだと確信している。アリストテレスは『命題集』において、シビュラや卓越した皇帝たち、偉大な哲学者たちは黒胆汁をもっていたといい、それが驚嘆すべき言動を起こしていたと述べた。

悪魔憑きは世界中すべての哲学者にとって明らかでゆるぎない経験である。これはアリストテレス以前にまちがいなくあった。なぜなら、ヨセフスその他が証言しているようにソロモンが悪霊たちを払うために悪魔祓いを教え

ていたからである。だが、アリストテレスはこの体液が知性と理性において男性の場合、より卓越したものとなると断定したのではなかっただろうか。理性ほど人間において崇高なものはないと彼は認めている。理性が何らかの方法を用いて知らないものごとを暴いたり、未知の言語を話させたり、知られていない、あるいは未来のことがらを言い当てたり、教わっていない格言を引用し解釈したり、といったことができないのに、これらすべてのことをこの物質的な体液はどうやってなすことができるだろう。同様に、これらが文字通り理性に属すると認められるだろうか。これらをこのような体液のせいだとするのはさらに困難だ。それに、これらのことは同様に他の体液の人間にも起こることである。悪魔に取り憑かれたコリント人の姦淫者が黒胆汁気質 ではなかったことは大いにありうる。この男はむしろ愉快でよく食べる者だった。キリストが悪魔憑きから追い払った悪魔が豚に入ったとき、そのような人間の黒胆汁が豚に移されたというのは馬鹿々々しい。[……] したがって、以上の経験は私たちと共に密かに生き、時々姿を見せる霊がいることをすべての哲学者たちを納得させるのに十分なものである。

サタンは悪霊どもの首領であるが、彼は傲慢さにより民の数を数えるようダヴィデを唆し、神の死刑執行人（災いの使い）としてエジプトに多くの禍をもたらした。神はしばしば悪魔たちに犠牲を捧げることを禁じているが、もし悪魔がいなかったらそうしなかっただろう。ヨブとその財産や召使を襲ったのはサタン自らに他ならず、サタンはイエス・キリストをさえ試したと聖書で語られている。悪霊と並んで、善霊たる天使の存在もミカエリスは明白であると述べる。神は人間がもう命の木の実を取って食べないように楽園の門にケルビムと剣の炎を置いた。このケルビムは人間でなく、霊である。聖書は神の使いである天使についてしばしば語っている。アブラハム、ロト、ヤコブその他の者たちに対し、天使は人間が知らないことを予言している。例えば、老いた不妊の妻の妊娠やソドムとゴモラの破壊についてなどである。このような霊が神の使者であることは明らかだとミカエリスは言う。したがって、主に聖書による多くの当然の理由と抗しがたい経験から、善霊と悪霊

がいることは確実であると彼は結論する。また霊は身体をもたず、もっているように見えるとき、その身体は借り物の身体であり、善霊は天の上層に住み、悪霊は空中に存在するとされた。

5. 悪魔とその力について

呼び出しに応じて願いをかなえてくれるため、悪魔は人間に奉仕しているように見えるが、実は人間を支配しようとしている。悪魔は身体的に人間を支配することを喜ぶ。その体の支配者になるからである。なおさらよりいっそう喜ぶのは、計略によって哀れな魂を支配し神の認識を取り去るときだ。悪魔は非常にぞっとするような危険なものであり、ケンタウロス、3つの頭をもつ犬、詩人たちによって表現された他のそのような怪物によっても十分に表すことはできないだろうとミカエリスは述べる。もし誰かがこのようなたけり狂った怪物と親しくなりたいと望んで近づくな、その者は正気を失っているとしか思えないが、これこそが常に妖術師たちと魔術師たちがしていることだとされる。妖術師が行ったとされている諸行為は、「1582年にアヴィニョンで18人の妖術師の男女に下された判決の要約」が簡潔に示しているが、当時のエリートたちの中にはそのようなことがらを妄想にすぎないとする者たちもいた。このような者たちに対して、ミカエリスは以下のような論法で説得を試みている。

まず、妖術師たちについて言われていることが真実であるとする典拠として、ユスティノスの記述が取り上げられる。言及されているのは、『第一弁明』(5.2)の悪霊たちは実にしばしばときには女性たち、ときには男性たちと肉体的に交わるということと、『第二弁明』(5.4)の悪魔たちはある種の条件が伴わなければ、常に願いをかなえてくれるわけではないということである。例えば降霊術の際に悪魔は妖術師に思春期に満たない思春期に満たない少年を連れてくるよう要求する。そして、サタンが私たちの理解できる自然の力を超えたものである点をミカエリスは強調し、聖パウロもサタンの働きはあらゆるしるしと驚異を伴う(2テサ 2:9)と述べているのではないかと

う。

サタンは自分を頼ってきた者に対して、大きく分けて次の2つの方法によって作用を及ぼすとミカエリスは言う。ひとつは寝ているあいだに、もうひとつは起きているあいだに成し遂げられる。前者は夢であり、後者は呪いである。この2つの方法は聖書においても言及され、夢占いやまじないは神によってしばしば禁じられている。最初の夢で起こるというものに関してだが、これは魔女狩りに反対する者たちが拠り所としていた『司教法令集』の立場であり、妖術師たちの諸行為は常に夢の中で起こり、単なる間違い、作り話であるとするものである。ミカエリスは、聖書、教父、歴史家の証言があるのだから、妖術師と魔術師によるすべての呪いや悪しき所業を実際に起こったことと見なすべきだと考えている。また、妖術による現象が片方にとっては夢でもう片方にとっては現実だということもありうるという。例えば、妖術師たちはしばしば軟膏を体に塗り、魔術的な飛行や変身を行っていると考えられていた。この件に関してミカエリスは次の3つの可能性を考えるべきだとする。①寝ている、夢を見ている、②現実に行っている、③別の場所に行っているあいだ悪魔がかわりをしている。このようなことが夢でしかない、あるいは同様に現実にも起きている、またあるいは寝ているように見えている体が幻か知らねばならない。

当時の聖俗両方のエリートたちがそうであったように、妖術の現象を解釈するにあたってミカエリスもまた無分別に極論に走ることはなく、冷静に合理性を追求する。彼は守るべき3つの原則があるとする。まず第1に、経験と続いて起こる現実によって判断しなければならないと述べる。聖書に記されたできごとはミカエリスにとってはまぎれもなく経験された事実であった。したがって、モーセがエジプトでしたことは幻ではない。悪魔がヨブにしたこともそうだ。次に現実起きた妖術の証拠と妖術師の証言が妖術的な現象の真実性を保証するものとなる。例えば、妖術師たちが行くとされていた幼児殺しには真実性がある。なぜなら、彼女らが窒息死させた子供たちは、実際に両親によって窒息したと報告されていた。妖術師たちの体につけられたしるしにも真実性がある。サタンへの賛美に用いる洋服の端切れにも。彼女たちが用いる呪い、それは人間や獣に対して行使され、それらを愚かにし、

死んだように見せるが、一言呪文を唱えることにより元通りにする。

第2の原則はアウグスティヌスとトマスによるものであるが、すべては悪魔の自然な力によるものと見なすべきだというものである。アウグスティヌスはディオメデスの仲間たちの鳥への変身に関して、実体により身体の移動でなされたという。悪魔の本性の力では、ひとつの体を別の体に変えることなどまったくできないからだ。そのためこれはひとつの体を見せながら、移動により別の体を代わりに置いたに違いないとされる。前者の実体を変化させることは悪魔の力を超えているとし、アウグスティヌスはこの可能性を認めない。そして悪魔の力を超えない後者の可能性に賛同する。トマスもアウグスティヌスに従い、まずは疑ってかかることを勧める。死者の蘇りやその他似たような超自然的なものごとに関して、幻覚だと考えるべきだとする（ST., I, q. 114. a. 4. ad. 2）。神は普遍の摂理によって悪霊たちを用いるが、悪霊たちには超自然の恵みはなく、奇跡の業は自らと自らのものたちに取り置いている。妖術師たちがしていることはすべて悪魔の本性的な力による。

第3の原則は「普遍性」に基づき実証することであるとされる。アウグスティヌスはそのようなことがらを作り話だとあえて単純化することなく、自分の時代よりずっと前に行われ、今でも世界のあちこちで行われ、多くの人の目撃談や証言があることだとした。この普遍性はヒポクラテスも述べたことであり、ペストが普遍的であるときそれは普通の原因に由来せず、それらは神と目に見えない原因に帰すべきだとしたとミカエリスは述べる。そして普遍性という観点から妖術の存在を論証する。

私たちの時代のフランスの妖術師たちが、現代あるいは60年あるいは80年前のドイツの妖術師たちと同じことを証言しているのは重要なことだ。ラテン語や俗語で書かれた証言などを読んで学習したと思われるだろうが、彼女たちは庶民であり、彼女たちの知性の愚かさは人間よりむしろ動物に近い。このような普遍性と一致はことがらの真実性を十分に理解させるに足りる。これは理性に反するといって、時に私たちが提示するもう一つの根拠であるまさに理性に訴えようとしても。というのも、木曜の晩にしか起こりえない

ものをどうやって夢見ることができよう。その夢が同様に別の日に見られうるのに。しかしながら、このような集会が木曜日にしか起こらないことは皆が認めている。私たちは理性によってどうして他の曜日にではなくこの曜日になのかと問う。さらに、もし夢でしかないなら、どうやってさまざまな時間と地域において、それぞれはなはだしく隔てられたこれほど多くの人々が同じひとつのものを夢で見ることができるだろうか。医者たちは肉の多様性と分量が夢の多様性の原因であることに同意している。このような人々すべてがかつて同じ肉を似たような量、今日似たような夢を見る者たちとすっかり同じに食べていたのだろうか。医者たちは同様に、気質の複雑さが多様な夢を見させることにも同意している。多血質の者がたいていは楽しい夢を、黒胆汁質の者はつらい夢を、好戦的な者は戦争を、少年はたいてい老人とは違った夢を、男は女と違った夢を見るものだ。私はアリストテレスとアルテミドロス〔2世紀後半のギリシアの著述家。『夢判断の書』の著者〕、その他夢についての著作を残した者たちから学んだ。したがって、大部分の人々は気質、年齢、性別、宗派において異なっているのに、皆が互いにまったく異ならない同じひとつのものを、おまけに同じ曜日と時間に夢で見ている、あるいは見ていたということがどうして起こりえよう。これを引き起こしたのは悪魔だと言うことができるだろう。よろしい。だいぶ真実に近づいてきた。なぜなら、このことがらが人間の力を超えたものであり、悪魔の効力に帰すべきだと同意されているからだ。それゆえ、悪魔がこのようにできることから、なぜ人はこれが本当の夢であることにしか同意しないのかと私は問う。このことが同様に悪魔の力の及ぶところであるのに、なぜことがらの真実性に同意するのに困難があるのだろうか。経験を結び合わせると、聖書、教父、歴史に矛盾しておらず、世界の終末時にこのようなことがこれまで以上に頻繁に起こることがすでに予言されていたのである。

最後の一文の「世界の終末時に」という言葉に注目しておきたい。フランスでは16世紀をとおして終末論的思潮の流行が見られ、宗教戦争の行われていたあいだはこれが一段とエスカレートした。人々は異端が増大すると、

これとともに彗星、日食、洪水などの天変地異やさまざまな災害が頻繁に起きていると信じたが、このことは、「ヨハネの黙示録」の流行を促し、「神の間近の再臨」を前に一種の集団的な「恐怖」を呼び起こしたとされる。ミカエリスは『霊についての言説』において、妖術を終末論的な枠組みの中で解釈している。クラークによれば、ミカエリスは「世界の終わりには妖術が広く行われるだろう」とする教父の予言に基づいて妖術師たちの行為に関して言われていることを真実として受け入れていたという。サタンの力が増大する終末が到来しているという恐怖は、妖術師たちの暗躍を確信させる根拠となっていたと考えられる。

終わりに

ミカエリスは、まず、霊が存在するか、悪魔の力はどれほどのものなのかという、妖術師とかかわる根本的な問題を検討した。そして、聖書、アウグスティヌスやトマスをはじめとした教父の言葉と歴史上の事実を基盤とし、そこに見聞きした経験を加味することによって、妖術の存在は疑いえないものであると主張した。このように、彼の論証の骨子となっていたのは、権威と経験（普遍性は経験されることにより獲得されるため、ここに含める）であった。この両者が巧みに組み合わされているため、そこにはある種の合理性が感じられる。この「合理性」こそが「魔女狩り」を思想的に支えていたものであったように筆者には思われる。人間が判断するものであるがゆえに、何が合理的であるかは時代や場所によって大きく異なる。今日私たちが合理的であると見なしていることがらの中にも、数百年後に愚行の烙印を押されるものもあるかもしれない。合理性の暴走ほど恐ろしいものはない。人間の知性の危うさを本書は再確認させるものでもあった。

ミカエリスの生きた時代のフランスは宗教戦争の惨禍の渦中にあり、ペストや凶作に繰り返し見舞われていた。「魔女狩り」の問題を考えると、このような外的要因は非常に重要なものである。平和で悪の気配の希薄な社会にあっては、妖術師たちの所業がリアリティをもって迫ってくることは考えに

くい。人為的なあるいは自然による災害により、危機的な状況に陥ると防衛本能が働くのは動物として自然なことである。その際に、自己を護り、優先させるために他者をないがしろにする、さらには犠牲にするようなことも起こりうる。そのような場から悪魔は滋養を得るのだと考えられる。